



【本教材のガイダンスと到達目標】

- **対象者：** 神奈川県公立高校入試を受験する中学 3 年生（および指導者・保護者）
- **特に向いている生徒：**
 - 帯グラフや円グラフの面積・%だけを見て、「数字が下がっているから実量も減った」と直感で選んでしまう生徒
 - 「シェアが高い小国」と「シェアが低い大国」を比べたとき、どちらの実数が多いか判断に迷う生徒
 - 「1 人あたり GDP」と「GDP 総額」、「都市化率」と「都市人口」のような単位あたり数値と総量の区別が曖昧な生徒
- **このプリントでできるようになること：**
 1. 提示された資料の軸や凡例から「割合 (%)」と「絶対量（金額・数量・人口）」を瞬時に峻別できるようになる。
 2. 同一の母数内であれば「割合の大小＝絶対量の大小」と判定でき、母数が異なる資料間では「割合の大小だけで絶対量の大小を比較できない」という境界線を明確に適用できるようになる。
 3. 2012 年度のアルゼンチン輸出統計のように、「割合が低下していても、母数が拡大していれば実額は増加する」という関係を、簡単な概算（掛け算）で論理的に見抜けるようになる。
 4. 内包量（比率・平均・単位あたり）と外延量（国全体の総量・絶対量）の違いを整理し、設問の述語（単位）と資料を正確に照合できるようになる。
- **推奨する使い方：**
 - **Step 1（理論の整理）：** 第 1 章～第 5 章を読み、割合と絶対量の数学的関係、内包量・外延量の定義を頭に入れる。
 - **Step 2（自力演習）：** 第 6 章の実戦定着ドリル（全 10 問）を、問題用紙の余白に母数と割合をメモし、簡単な掛け算の概算を行いながら解く。
 - **Step 3（誤答分析）：** 解答解説の「失点パターン分析」を精読し、グラフの見た目（面積や%）に引きずられていなかったかを検証する。
 - **Step 4（過去問演習）：** 末尾の「過去問演習優先度表」に従い、定量処理が問われた年度を演習する。

【冒頭 1 分要約：割合と絶対量の解法の核心】

【結論】統計問題は「グラフの見た目の高低」で解いてはならない。

「割合 (%) = 相対的な比率」であり、「絶対量（実額・実量・実数）= 母数 × 割合」である。

① グラフを見たら、真っ先に「軸の単位」と「母数（全体量）」を確認せよ

- ・同じ母数の内訳同士なら、割合の大小から絶対量の大小も比較できる

（例：40%の品目 > 30%の品目）。

・ただし、異なる年・異なる国など母数が異なる資料同士では、割合だけから絶対量の大小を判定してはならない。

- ・母数の数値が示されていない場合、割合から具体的な絶対量の数値を求めることはできない。

② 「割合の低下＝絶対量の減少」と即断するな

・母数（全体量）が大きく拡大している場合、割合が下がっていても実額は増える（2012 年型）。

- ・「母数の変化倍率 × 割合の変化倍率」が 1 を超えていれば、実額は増加している。

⇒ 2012 年アルゼンチン食肉：割合 5.8% → 4.1%（低下）だが、実額 9.19 億 → 22.82 億ドル（約 2.5 倍に増加）。

③ 異なる国の%同士を直接比較して実量を決めるな

・割合が 70%の国 X と、割合が 40%の国 Y であっても、国 Y の全体規模が国 X の 1.75 倍を超えていれば、

実量は国 Y の方が多い。

⇒ 国家間比較では、必ず各国の母数（全体規模）を掛け合わせて比較せよ。

④ 「1 人あたり（内包量）」と「国全体（外延量）」を取り違えるな

- ・内包量（比率・平均・単位あたり）： 1 人あたり GDP、都市化率、人口密度。

- ・外延量（国全体の総量・絶対量）： GDP 総額、都市人口実数、総人口。

⇒ 選択肢の文末（述語）が「割合」を主張しているのか「絶対量」を主張しているか確認せよ。

第 1 章：神奈川県で 15 年連続確認された「定量処理」と割合・絶対量

1. 15/15 年度（100%）で確認された定量的資料処理

神奈川県公立高校入試の世界地理（問 1）において、統計表、棒グラフ、円グラフ、帯グラフなどを用いた定量的データ処理は、**2012 年度から 2026 年度までの 15 年間すべて（100%）で出題されている**。地理の配点において、統計の客観的読解は避けて通れない柱である。

2. 「割合と実額」の峻別を迫る出題（2012 年度の出題例）

この定量的処理の中でも、受験生がグラフの見た目に引きずられて誤読しやすい典型が「割合（%）」と「絶対量（実額・実量・実数）」の区別である。

とりわけ 2012 年度の問 1(ア)では、アルゼンチンの輸出品目構成比（円グラフ）と輸出総額の年次推移を複合させ、「割合が低下している品目の輸出額（実額）が増加している事実」を正しく判定させる設問が登場した。

近年の入試においても、資料の数値や単位を正確に読み取り、選択肢の記述と照合させる処理は一貫して求められている。